戦後詩雑誌研究会

第2回

科研費・基盤研究(C) 雑誌「詩学」「現代詩」「ユリイカ」を中心とする昭和30年代詩の研究（研究課題番号19K00357）

雑誌「詩学」「現代詩」「ユリイカ」を中心とする昭和30年代詩の研究

ZOOMによるオンライン開催【※要事前申込み】

参加希望の方は、katokuni@gmail.comまでお申し込みください。
当日までに、ZOOMミーティング参加のためのURL、アップロードした資料のURLをご連絡いたします。

日時	2021/3/21㊐	13:25～18:00
1	13:30～14:10	宮崎真素美／展開する『詩学』1
2	14:20～15:00	加藤邦彦／新日本文学会から現代詩の会へ ―1958年前後の「現代詩」―
3	15:10～15:50	疋田雅昭／詩のアイデンティティをめぐって ―ジャンル越境をアダプテーションとして考え直してみる試み―
	16:00～18:00	質疑応答と全体討議

―― 来聴歓迎・参加費無料／お問い合わせ　katokuni@gmail.com（加藤邦彦）――

戦後詩雑誌研究会

第2回

雑誌「詩学」「現代詩」「ユリイカ」を中心とする昭和30年代詩の研究

本研究会は、「戦後詩の第二世代」と呼ばれる詩人たちの活動を支えた詩雑誌、「詩学」「現代詩」「ユリイカ」を中心に、昭和 30 年代の詩について検討します。戦後詩の第二世代は、批評の方面では非常に多く取り上 げられているものの、研究としてはまだほとんど進んでいません。そこで、「詩壇ジャーナリズムの第一期」を形成した上記 3 誌に注目することで、(1)戦後詩の第二世代の特質およびその形成過程、(2)昭和 30 年代の詩の展開が雑誌メディアによって誘導され、かたちづくられたものであることを明らかにすることを 目的とします。今回はその第 2 回目です。

科研費・基盤研究(C)「雑誌「詩学」「現代詩」「ユリイカ」を中心とする昭和 30 年代詩の研究」(研究 課題番号 19K00357)の一環です。

発表要旨

1 宮崎真素美／展開する『詩学』1

『櫂』の詩人たちが新人としてあらわれた「詩学研究会」をはじめ、マチネポエティクに対する検討、地方詩壇への目配り、近代詩史の意識化など、世代を超えた詩人たちのつながりを見た前回「はじまりの『詩学』」(創刊～昭和 20 年代)に続き、それらが展開してゆく昭和 30 年代前半を捉える。「詩学研究会」出身の詩人たちの活躍によって、その指南役であった『荒地』世代の詩人たちが相対化されるのとともに、「詩」と「詩学」がどのように拓かれてゆくのかを追う。

2 加藤邦彦／新日本文学会から現代詩の会へ
— 1958 年前後の「現代詩」 —

1954 年創刊の「現代詩」は、発行所が新日本文学会に編集費を支払うとともに営業の責任を追うかたちで、もともと百合出版から出版されていたが、1956 年 7 月号より緑書房(1957 年 5 月に新制作社と改称)、1957 年 9 月号より書肆パトリア、1958 年 7 月号より飯塚書店へと発行所を変更していく。この飯塚書店への変更の際に、「現代詩」の編集は新日本文学会詩委員会から現代詩の会へと移った。つまり、「現代詩」は新日本文学会の機関誌ではなくなったのである。「現代詩」が新日本文学会から離れた事情とその前後の雑誌の動向を、文壇からの詩壇に対する評価を視野に入れつつ概観する。

3 疋田雅昭／詩のアイデンティティをめぐって
— ジャンル越境をアダプテーションとして考え直してみる試み —

第一期ユリイカの試みを整理すると、新人の育成、歴史化(日本詩史という縦軸、コスモポリタンにみる横軸)、コラボレーション(画、音楽、ラジオ劇)という三つの柱が考えられる。この観点から、雑誌掲載記事を概観しつつ、そこに通底している理念—詩のアイデンティティをめぐる諸問題がどのような形で展開されたのかを考えてみたい。具体的には、長詩の連載(から詩集としての刊行)、ラジオドラマとしての詩劇の実践や書肆ユリイカによる詩画集などの刊行などを、詩と○○の邂逅とか、○○から詩へというベクトルとは逆の試みとして捉え直してみたいと思っている。